

♪ シニア便り ♪

第17回定期演奏会を終えて

	副団長・常任指揮者	中村 暁生
第17回定期演奏会・実行委員長		鈴木 隆起
『70年の回顧』	ホルン・ソロ奏者	勘米良二六生
『シニア吹奏楽団の方々との共演を通して』		
	札幌市立旭小学校	山瀬 浩詠
『運命のいたずら！？』	司会	加藤真奈美
『編曲と調の選択』	副指揮者	石井 邦紀

一筆吹奏（新入団員のごあいさつ）

『暗い 暗い 私が・・・』	トランペット	渋谷 桐子
『夫婦で吹奏楽』	E クラリネット	佐々木麻美
『我が吹奏楽人生』	テナーサクソ	長内 孝一



第16号（2010年12月発行）

発行 北海道シニア吹奏楽団・事務局

編集 シニア便り・編集部

『第十七回定期演奏会』 を終えて

副団長・常任指揮者 中村 暁生

第十七回定期演奏会が、団員皆様のご努力とご協力を頂いて無事終了しましたことに對し、先ずもって心からお礼申し上げます。

紙上をお借りして、今回の演奏会で私が感じたことの一部を申し述べたいと思います。

一、演奏について

若干の事故はありましたが、持てる力を充分に發揮し、心のこもった演奏であったと感じました。特にソ口を担当された勸米良さん、渡辺さん、編曲に当たって下さった石井さん、鈴木さんのご努力に拍手を贈ります。また今回の演奏会をきっかけに、演奏力が格段と向上された方々も居られたことは力強い限りです。

二、企画、運営について

実行委員長・鈴木さんをはじめ、トランペットパートの皆さんによる綿密な計画と的確な指示、行動により演奏会が円滑に運営されたことを高く評価するとともに、賛否はあると思いますが「宇宙」という統一のテーマを設けたこと、運営のための多

くの資料を残されたことは今後、担当されるパートには大変参考になることと思います。

三、HTBの取材について

ほぼ全員の皆さんが放送をご覧になってそれぞれ感想をお持ちのことと思いますが、当団の存在の意義や活動方針、練習状況や雰囲気は充分伝えられたものと感じました。ただ、設立の主旨と林団長のご尽力について詳しく説明したのですが、番組の中で取り上げられなかったことは本当に残念でした。(後日、担当デレクターから謝罪の電話がありました)

四、演奏についての今後の課題

五十名を超える編成となったことは大変喜ばしいことなのですが、逆に演奏に緻密さが欠け、音程の保持が不十分でした。特に今回は慣れない系の曲、「天体の音楽」で目立ちました。また、テンポや強弱の変化への反応ももうひとつと感じました。今後練習方法を含め、出来る範囲で一つ一つ改善を重ねて、演奏をする私たちがより大きい充実感と連帯感を得、お客様にはより喜んでいただけるような団体を目指していきたいと思っています。

第十七回定期演奏会実行委員会

実行委員長 鈴木 隆起

去る十月二四日に開催した北海道シニア吹奏楽団第十七回定期演奏会につきましては、関係諸団体の皆さま並びに多くの団員やOB・OGの皆さまの温かいご声援とご協力のお陰をもちまして、何とか無事に終了いたしました。

演奏会の最後の幕が下りた瞬間、私は「あー、終わった。」という、安ど感とも達成感ともつかない複雑な思いで一杯になりました。

思えば今から一年ちよつと前、トランペット・パートで初めての実行委員会を開催しました。正直言います、航行したことがない海原へ漕ぎ出した船の船頭のような、多くの不安に満ちた感覚だったことを覚えていきます。

私も含め、ほとんどのメンバーが未経験という状態です。

とにかく何かから手をつけたら良いものか、数日間考えたり、前実行委員に訊いたりしながら、まずは大雑把なスケジュール表を作成しました。その後、中村先生にも委員会をフォローしていただきながら、「後でもやり直しができるように」との考え方で、とにかく、早め早めの対応をしてみました。振り返るとあつという間のことですが、一つの大きなイベントを成功させることの難

しさを痛感した一年でした。

演奏会本番は、細かな点を除き、団員皆様のご協力もあつて、非常にスムーズに行われたと自負しております。入場者数は三六三名で昨年より二十名少ない結果ですが、これは当日券の販売数が昨年より五四枚少なかったことに起因するものです。しかし、仮に昨年並みに当日券が売れた場合は、入場者数が定員近くにならなくて立ち見などのトラブルが発生する可能性もありましたので、内心ホツとしたのも事実です。

今回の演奏会の成果は…と問われれば、何といつても勸米良さんの特別演奏を組み込んだことだと答えます。突然のTV取材でも、そのことが中心に取り上げられ、勸米良さんやご家族の方はもちろんのこと、我々団員にとつても印象に残る演奏会になったのではないのでしょうか。

演奏会終了後にお客様から頂いたアンケートは百十二枚でした。うれしい評価を沢山いただき、中には、「ヤマトで涙を流しました」というコメントもありました。

お客様に「感動」を提供することができたのは、何よりもうれしいことではないかと思えます。

この一年、実行委員長として全力で奔走してきましたが、非常に多くの調整や作業を委員会メンバーの間で行うことに限界を感じました。期間中の諸準備も中村先生を始め、経

験ある団員の皆さんのご支援がなければ、到底成しえなかったものです。実行委員が中心になって活動することは当然ですが、極端な稼働の片寄りを防ぎ、団としてのリスク管理のためにも、委員会以外のきちんとした応援体制が必要だと痛感した次第です。

今回の演奏会が終了するまでの間、不慣れによるものと思われる多くの失敗や失念が発生しました。この教訓を次期の実行委員会に引き継ぐことで、新委員会メンバーの不安や迷いを防ぎ、より良い発表会を実現するための糧となれば幸いです。

最後に、この一年お世話になりました皆様に対しまして、第十七回定期演奏会実行委員会を代表し、お礼を申し上げます。本当に、ありがとうございます。

『七十年の回顧』

ホルンソコ 勸米良二六生

西暦1940年・昭和十五年・紀元2600年、何れも三月五日、私は熊本県の片田舎に生まれた。本年三月の誕生日で満七十歳。この七十年間を振り返ると、多方面の方から沢山の暖かいご支援、ご協力と深いりがあつたからこそ現在の私があることを忘れてはならない。改め

て皆様方に感謝とお礼を申し上げますと思う。

さて、顧みれば私の歴史は音楽を教えてくれた自衛隊音楽隊抜きで語ることはできない。その一部を紹介しよう。

昭和三十三年六月末(十八歳)、熊本から長崎県の新隊員教育隊入隊。

三か月後の九月、北海道留萌部隊配属。滝川部隊を経て、渡道から約三年半後の昭和三十七年一月に札幌真駒内駐屯地の門をくぐった(二十一歳)。新しい音楽隊は、第十一師団音楽隊と称し、これからここでやるんだと心が弾んだ。音楽隊の一員となるために徹底してたたき込まれた基礎的音楽理論、担当楽器(Horn)の基礎的訓練、音階、奏法等の反復演練に明け暮れた。

それから二年後のある日、エゴの名手(後で解ったことだが)「デニス・ブレイン」という奏者のレコードを聴く機会に恵まれた。モーツァルト作曲ホルン協奏曲全曲であった。音色、スラー、スタッカート、ダイナミックス、そして曲の表現、どれをとつても今まで聴いた事の無いすばらしい演奏技術を耳にした。その日からというもの、あのエゴの音が忘れられず、どうしてもエゴを吹きたい事を上司に申し出た。が、願いが実現したのは二年後の二十六歳の時である。

我々の年代の方はご存じだろう。

私が持った楽器は、日管(日本管楽器製造)のもので三本ピストン。音は出づらく、コロコロひっくり返り、音をつかみ安定させるのに大苦勞した思い出がよみがえる。当時のまろろ吹きで豊富な知識を持った人はおらず、自分で勉強するしかなく、やる所までやるうと決心した。

自らエゴ担当を申し出したこともあり、他のブレイヤーに追いつくためには半端な練習では駄目だということと、その責任は重大だということを認識し、基本練習を中心に朝、昼、晩、休日の私的時間を活用し楽器を吹きまくった。自己自我流ではあつたが一年程経った頃から何とか音も安定してエゴらしくなり周囲の先輩、同僚からも認められ、それが自信にもつながり、より一層練習に打ち込むことができた。合同演奏、他隊への演奏支援などを通じ、各隊のエゴ奏者との交流も盛んになりエゴ談義に花が咲いた。と共にアルコールの量や回数も必然的に多くなり、飲兵衛と呼ばれることになったのもこの頃である。二十八歳で家庭を持ち、エゴと仕事との両立は厳しくなつた。仕事、呑み会が優先である。

昭和四十七年二月、札幌オリンピック冬季大会を迎え、式典等の演奏で行事に参加することになった。この行事の訓練が始まる前、以前から話題になっていた「独製エゴ・アレキサンダー」を「ムンクムンク」

が納品されて私が吹く事になり、隊員一同の前で楽器が手渡された。デザイン、全体の色、軽量、何と云つても音の出し易さが一番の魅力であった。当時、この種のエゴは極く限られた人達しか持てない状況であり、私はつくづく思った。「Horn」を吹いて良かったナ」と。

その後は十数年間に三つの隊の音楽隊にお世話になり、平成六年夏、定年配置で北部方面音楽隊に戻り、平成八年三月五日、在籍三十七年余りに終止符をうち定年退官となる(五十六歳)。

休む間もなく中村氏の依頼を受け、三月のシニア練習日から入団、現在に至り十五年目。昨年、六十九歳を迎えた時に、来年は七十歳の節目に何かをやってみたいと考えたが、私にはエゴしかないと思いソコ志願を中村氏に申し出た。快く承諾されたが演奏会テーマとの件もあつて実行委員会で審議の結果OKとなり、内心ホツとした。今回も言い出しつべという事でプレッシャーもあつたが、それは練習でカバー出来ると信じ「自分(己)に勝つ」を念頭に技術錬磨に励んだ。

最後に、私はホルンという楽器に対する情熱と生涯ブレイヤーを目指したい気持ちとを両立させながらこの年齢まで担当して参りました。七十にして起つ(ステージに)を旗印に他人に頼らず、自我流の練習に励ん

で定演に望みました。

十四年間お世話になったシニアの
団員一人一人の方々にお礼と感謝の
気持ち伝えるため、また恩返し
のため、音で形を表現し、精一杯のプ
レイをしました事を付け加えさせて
頂きたいと思えます。時代遅れの物
事にこだわり、頑固でつまらない爺
様ですが、ホルン吹きは生涯と決め
ております。

左手でホルン、右手でお湯割り
と自我流の生き方をする私でも良かっ
たらシニアで吹かせて下さい。
ありがとうございます。



『シニア吹奏楽団の方々との

共演を通して』

札幌市立旭小学校 山瀬浩詠

旭小学校金管バンドは、今までに
三度、シニア吹奏楽団の方々と定期
演奏会と同じ舞台上に立たせていた
きました。私自身も二度、シニア吹
奏楽団の定期演奏会で共演させてい
ただきました。このような貴重な機
会をいただくことができ、大変光栄
であり、子どもたちにとって有意
義な時間となりました。

シニア吹奏楽団の方々と一緒に演
奏できると聞き、初めは「楽しみだ
なあ。でも、うまく吹けるかなあ。」
と期待と不安が入り混じっている様
子の子どもたちでした。

しかし、シニア吹奏楽団の方々
旭小学校に来ていただいた一緒に練
習をした後は、表情が一変しました。
「今日の練習、とっても楽しかった
よ。」「今まで吹けなかった所が、
教えてもらって吹けるようになった
よ。」と言って顔を輝かせていまし
た。練習の際、何度もシニア吹奏楽
団の方々演奏してくださる光景を
目にして、子どもたちは身近に憧れ
の存在を見つけることができたのだ
と感じます。

また、シニア吹奏楽団の皆さんは、
温かい人柄の方ばかりで、「今日一
日で、だいぶうまくなっただね！こ
れからが楽しみだなあ。」と子ども
たちを励ましてくださいました。

自分と同じ楽器演奏者の方に褒め
られ、子どもたちが本当に嬉しそ
うに微笑んでいたのを今でも覚えて
います。

旭小学校金管バンドの子どもたち
は、慣れない場面だと緊張してしま
い、自分の力がうまく出せない子も
少なくありません。しかし、練習を
重ねるたびに、子どもたちはシニア
の方とまた一緒に練習できる日を楽
しみに待つようになりました。
シニアの皆さんと過ごした時間が

それだけ居心地がよかったのだしょ
う。

シニア吹奏楽団の方々との合同演
奏の練習や交流を通して、時代や世
代を超えて人と人とを結び付ける音
楽の素晴らしさを改めて実感するこ
とができました。これまでの経験は、
子どもたちにとっても忘れられない
思い出の一ページになったことは間
違いありません。

シニア吹奏楽団の皆様重ねて感
謝申し上げますとともに、益々のご
発展とご活躍を心よりお祈り申し上
げます。



『運命のいたずら!』

司会 加藤 真奈美

今年もお世話になりました。今回
はナレーションがあり、内心ドキド
キしておりましたが、何とか終える
ことができました。通常のコメント
は多少間違ったり噛むことがあつ
ても、ナレーションはそういうわけ
はいきません。アニメの吹き替えで
噛んでいる人なんていませんから

ね。絶対に成功させなくてはいけな
い、そんな心積もりで挑ませていた
だきました。ナレーション部分で一
箇所危ない部分がありました。な
んとか持ちこたえることができました。
安堵。

打ち上げでビンゴ大会があり、お
かげさまでみごと第二位を獲得、大
きいつづらと小さいつづら、どちら
を選ぶかの選択を迫られ、「がめつ
い」「欲たかり」と思われたくない
私は、小さいつづらを選ぼうと思っ
たその時、近くにいた女性から「大
きい方!」との声が!私は迷うこと
なく大きいつづらをチョイス。中
に入っていたものは・・・なんと湯たん
ぽ!実は欲しかったのです。長らく
使用していた湯たんぽが、今年のは
じめに老朽化で穴が開き、廃棄して
しまいました。近所にあるスーパー
に買いに行ったところ、すでに売り
切れで、入荷の予定は未定とのこと。
まもなく暖かい時期を迎えようとし
ていた頃でしたので、当然でしょう。
そんなこんなで未だ湯たんぽを購
入しておりませんでした。もらっ
ちやいました!!しかも「牛さん」の
かわいらしい袋まで付いて。

自席で大きなつづら袋を空け、感
嘆とともに隣に座っていたパーカス
の矢野さんに「牛って、私の干支な
んです!」というと、しばらく沈黙
が・・・きつと「加藤ってそんなに
年くつてんの?」と思っている?

沈黙を破り、矢野さんの口から出た言葉は「同じ：：学年：：ですか？」今まで何度も顔を合わしていたにも関わらず話などほとんどしたことがありませんでしたが、一気に壁が粉碎された気分でした。

ひよんなことで、欲しいものが手に入り、たくさんの方と親睦を深めることができ、運命のいたずらを感じました。

単なる演奏会に終わらず、すばらしい出会いやチャンスの糸口につながることを今後も期待したいものです。



『 編曲と調の選択 』

副指揮者 石井 邦紀

第十七回定期演奏会「苦労さまでした。特に私の編曲した「天体の音楽」では、シャープの多さに辟易した方が大半だった様です。私自身の中では、半分は「申し訳なかつたかな」と思っています。残りの半分は「調号の多い少ないの問題は慣れであり、現代の性能の優れた楽器を操っている方々は、全ての調のスケー

ルとアルペジオの練習を心がけ、どんな調にも対応できるようにしていなければならぬ。」との原則も頭をよぎっています。

今回の調の選択については、取り敢えず一番分かりやすい言い訳として「使われている音域のこと、例えば、半音下の調にすると音が出しづらい楽器が出てくる」と説明していましたが、（半分は本当のことです）。それは、決定的な理由ではありません。では、なぜオリジナルの調のままに編曲したのかを述べたいと思います。

皆さんは、「調性格論」と言う音楽に係わる理論(考え)をお聞きになったことがあると思います。バロック時代にマッテゾンが唱えたものなどが有名です。1717年マッテゾン著の「新設のオーケストラ」では、各調による音楽のイメージを八長調は、かなり粗野で大胆な性質ではあるが、お祭り騒ぎや喜ばしい時には有効である。ト長調は、人を惹きつけるような、雄弁な性格が強いが、輝くばかりでもある、快活なものにもまた真面目なものにも向いている。二長調は、いくぶん激しく頑固な性質を持ち、騒ぎや、快活で好戦的かつ鼓舞するようなものに最適である。(以下省略)などと表しています。

なぜ、このようなことが考え出されたかについては省略しますが、ク

ラシック音楽の作曲家は、この考えに基づいて作品の調を選び作曲していた事実があります。(勿論、あまり囚われていない作曲家もいます)が(また、信仰的なことに起因する調の選択もあります)。

また、先に書いた、ことと矛盾する面がありますが、楽器ごとに苦手な調が存在することも事実で、金管楽器(管)を例にすると、記譜のA₂は、楽器の構造上、主音のAは高く・第3音のC₃は高め・第5音のE₃は低い(純正調は勿論、平均律に対しても)となり、正しい音階にするために、奏者は様々に工夫することを強いられます。その結果として、必然的に音色にニュアンスが付いてきます。(記譜のC₂が一番自然にストレスがない音階として聞こえます)。

では、ヨーゼフ・シュトラウスは、ワルツ「天体の音楽」を作曲したときにどの様に考えていたのでしょうか。

まず調の選択ですが、舞踏会で実用的に演奏されることを目的とした音楽ですから、明るく華やかな調を、またオーケストラ(弦楽器が主役)での演奏ですからシャープ系の調を選択したと考えられます。当然「調性格論」も熟知していたでしょう。

しかし、オーケストラレシーションを見るとトランペットとクラリネットは管が指定されています。もっと

シャープ系の調をストレスなく演奏できる管長の楽器は、何方も存在していたにもかかわらずです。ヨーゼフ・シュトラウスは、兄のヨハンと比べても優れた作曲家でしたから、この楽器法は偶然ではなく、かなり意図的なものと考えられます。

この調と管を組み合わせたことによる響きのニュアンスを欲しかったのではと、私は最終的に判断しました。(一時は異名同音調による系も含めた調も検討しました。)これが、例えばあまり演奏経験がない小学生や中学生のバンド用であれば、細かいニュアンスの再現よりも、演奏の容易さを選んだと思います。しかし、今回はシニア吹奏楽の為の編曲ですから、そこ(作曲者の意図)に拘りを持ちたかつたのです。

その為、皆様には大変ご苦労をお掛けしましたが、本番で演奏の導入部が始まったとき、私の選択が間違いではないかつたこと確信しました。とても素晴らしい、これから始まる舞踏会への期待を、誘いを、十二分に感じさせるものとなっていました。

皆さんの、重ねたご苦労の数々が報われた瞬間でした。これまでの、真摯な努力に感謝した一瞬でした。これからよろしくお願いいたします。

一筆吹奏

(新入団員の「あいさつ」)

『暗い 暗い 私が・・・』

トランペット 渋谷 桐子

物心ついた時から内向的で目立たない子供だった私が、高校生のときにフルートが吹きたくて吹奏楽部に入部しましたが、そこで渡された楽器は思いも寄らないトランペットでした。

おとなしかった私は辞めることもできず、当然やる気無し！、ただ無駄に三年間を過ごしてしまいました。

卒業してからは、仕事、子育てに忙しく、吹奏楽からは遠ざかっていました。

時は流れ、四十歳になろうとしていた頃、芦別のお祭りイベントで市民バンドの演奏を聴いて「何か楽しそうだなあ...、私もラッパを吹いていたなあ...」なんて思い出し、二十年以上のブランクがあつたのですが入団してしまいました。その団には高校の先輩がいたこともあり、イベント等の依頼演奏や行事も多く、楽しく過ごしました。

仕事の都合で札幌に移ってから、都合の良い時には芦別まで出かけて吹いていましたが、友人の紹介

で北海道シニア吹奏楽団を知り、入団して早くも二年。毎回楽しく練習に参加できるのも皆さんのおかげだと思っています。

こんな私の夢は、パーカッションの夫(仕事の都合で活動休止中)とパーカッションの息子(札幌市内の某楽団で叩いていました)が現在仕事で演奏することです。夫と一緒にステージ経験はあるのですが、息子と一緒にの機会はまだありません。

そして、目標は六十歳になるまでラッパを吹き続け、記念に何かしたいなあ...と思っています。

『夫婦で吹奏楽』

「ククラ 佐々木 麻美

三年前までは「夫婦で吹奏楽」なんて想像もつきませんでした。

三年前のある日、引越して主人の荷物を片付けていたら「アンサンブル・コンクール全道大会」と書かれたカセットテープが出てきて、そのケースに張ってあつた写真になんと高校生の主人らしき人物が！。主人に「これ何？」と聞くと「俺だよ。」との返事。吹奏楽部だったこと全く聞かされておらず私は「びっくり」。

よく聞くと、中学・高校と吹奏楽部でチューバを吹き、しかも両校でコンクール金賞を獲ったり、相当な

腕前の様子。私が吹奏楽を続けていることを知っている主人は、今さら「僕も吹奏楽をやっていた」とは言えずに、隠し続けてきたとか...。

それから、主人は札幌の某交響楽団でチューバを吹き始めました。

十三年振りに楽器を吹く主人を見ましたが、ブランクを感じさせない演奏に改めて感心しました。しかし、あまりにも古い借り物の楽器は音が出にくく、腕前が落ちたのでは落ち込んでいる主人の姿を見て「吹けないのは楽器のせいだと分かってもらう事と、楽器を買ってあげたい思い」から、主人と市内の楽器店にでかけました。いくつかのチューバを吹かせて貰いましたが、気に入った楽器はなんと百数十万円のドイツ「B&S」のものでした。

私は諦めきれず、その後も主人に内緒で楽器探しを続けていましたが、元札幌響・チューバの香川先生のところまで、同じ型番のチューバが新品同様の中古で見つかりました。何度も何度も頭を下げて、値切りに値切つて楽器を購入し、こっそり玄関に置いておきました。それを見つけた主人は「目が点」状態！。

その後、主人は某交響楽団を辞め、私と一緒にシニア吹奏楽団にお世話になることになりました。十一月七日の練習日には、その楽器を持って主人と子供達と一緒に練習に参加させて頂きました。

また、練習日のコーヒータイムで、アルト・サクスの長土居さんが主人の後輩であることが分かったり...、主人のアンサンブル・コンクールのプログラムを読み返していたら、審査員に中村先生がいたことが分かったり...。

以前から、シニア吹奏楽団に入団する運命だったので...。



『我が吹奏楽人生』

テナーサクス 長内 孝一

今回、お仲間にならせていただきました、長内(おさない)です。

サクスを吹かせていただくことになりました。よろしく願います。

自己紹介を兼ねて、シニアに入団するまでの道のりを書かせて頂きます。

初めて、管楽器を手にしたのは、小学校5年生で、アルトホルンを吹いていました。その後、今では、知る人も少なくなつた『メロホン』を吹き、高校一年生の時は一年間だけ

トランペットに回されましたが、二年からホルンに戻り、念願のマイホルンも手にしました。楽器はヤマハのベルカットのダブルで、手にした時は、うれしさで舞い上がっていたのを記憶しています。

就職先は「吹奏楽部」のある会社を選びました。当然、会社の吹奏楽部でもホルンを吹くことになると思っていたら、「おまえはサククスを吹け！」との指示。新入社員&新入部員では文句も言えず、しぶしぶサククスへの道となりました。

当時は、現シニアの団長でもある林先生に吹奏楽部の指導・指揮をして頂いていました。林先生からいつも気さくに声をかけて頂き、かつ指導もして頂いたおかげで「サククスもまんざらでもないなあ」という気持ちを持つようになりました。そして、少しずつサククスも好きになり、今もおこうして吹き続けています。このように音楽を続けて来れたのは、林先生のおかげだと思っています。

なお、会社の吹奏楽部はその後応援団の一部になり、数年前に応援団とともに解散してしまいました。

二十代の頃から、札幌シティバンドに入団していましたが、転勤その他の理由で三回入団し、三回退団しています。転勤先等のバンド等にも入りませんが、不思議なことに自分が入団した札幌以外の市民バンドは、

なぜか消滅してしまうという結果に至っています。

今春、家庭の事情で前バンドの練習に参加することが困難になり再び退団した所「シニアは日曜の午後の練習だからおいでよ」と有り難いお声をかけていただき、そのまま入団させて頂くことができました。

ちなみに、私はご存じピンクのテナーを含め、サククスを六本持っています。実はどれも一切自分でお金を支払っていないのです。

会社の元備品で廃棄処分の楽器を頂いてしまったり、たまたま購入した楽器が超レア物で買った店から交換しないかと持ちかけられたり、拾ったり…(笑)

自分で金を出して手にいれた楽器はすべて離れて行き、タダで入手した楽器のみが残るといふ何ともおバカな吹奏楽人生です(汗)

このような私ですが、どうぞよろしくお願いいたします。



「こんにちは 赤ちゃん

嬉しいお知らせがあります。

去る十一月十九日(金)午後三時三十五分、トランペットパートの高橋絵美さんが二五九八グラムの元気な男の子をご出産されました。母子共に元気とのことでした。

定演当日は「本番中に産まれなければいいけど…」という声も聞かれた中、本当に大きなお腹で本番に臨み、お疲れ様でした。

この場を借りて、団員一同、心よりお祝い申し上げます。お子さんを抱いて復帰されることを楽しみにしております。(編)



編集余録

・十二月から練習場がNTT北海道セミナーセンターになりますね。楽団設立当初の「かでる」から、「日鉄体育館(苗穂)」「オオクラ・ホール」と練習場は何度か替わっていま

すが、団員の方それぞれに、練習場の懐かしい思い出があるかと思えます。皆さんの練習場の思い出を、「一筆吹奏」で企画しようかな等と思っています。投稿大歓迎です!(伊藤)

・皆様、定期演奏会お疲れ様でした!今年テレビの取材があり、カメラが近寄ってくるとみなさん緊張していたように見えました(笑)。ですが新鮮でしたね。石井先生の編曲や勘米良さんのホルン独奏…どれもこれも素晴らしかったですね!個人的には一部で男性陣がジャケツトを着ていたのが素敵でした。楽器も映えていましたし。暑かったと思います。(編)

改めて、入団していることがとても誇りに思います!来年も良い演奏会になりますように! (長土居)

・今回から「シニア便り」の編集をお手伝いさせて頂いた事になりました。至らない点や編集作業に不慣れな点も多く、皆様にはご迷惑をおかけするかと思います。ながい目で見守って頂けたら幸いに思います。「シニア便り」が団員の皆さん同士を結ぶ糸口になればとも思っておりますので、ご意見、企画等ありましたら、是非声を掛けてください。よろしくお願い致します。(石田)

